

第2節 湖山池周辺の横穴式石室について

因幡地域の横穴式石室については、比較的密集している鳥取市～岩美町にかけての千代川以東の因幡東部地域について検討されており、盛行期の石室形態は、玄室天井部中央が一段高くなる特徴をもつものが多く、この特徴から「中高式天井石室」と呼ばれている⁽⁴⁰⁾。因幡西部に目を向けると、青谷町・気高町周辺では、各壁に大型の一枚石を用いる石室形態が知られており⁽⁴¹⁾、小地域毎で異なる石室形態が採用されていることに気づく。

さて、湖山池周辺の横穴式石室は、現在確認されているものは、倉見9号墳の他、石場山5号墳、高住12号墳、葦岡長者古墳（吉岡1号墳）のみと極端に少ない上、千代川右岸域とは異なる石室形態が見られる。

1. 湖山池周辺の横穴式石室の概要

倉見9号墳は、現在確認されているかぎりでは9基からなる倉見古墳群に属する。1～7号墳は標高約30mの高い尾根上にあるが、8・9号墳は、標高約15mの低い西側に延びる丘陵上にあり、異なる立地条件にある。さらに、高い尾根上のものは前期古墳であるが、低い尾根上のものは後期古墳と時期・性格も異なる。

さて、倉見9号墳の横穴式石室は、全長4.1m、玄室長2.3m、幅1.3m、羨道長1.8m、幅0.85mを測る。玄室比は、1.8と狭長な長方形を呈す。右片袖式である。玄室は、各壁ともに腰石上に割り石をほぼ垂直に、横目地が通るように積みあげている。天井の形態は不明である。遺物には、玄室内から鍍金を施した装飾大刀足金具、釣針、周辺から須恵器片が出土している。およそ6世紀後半頃のものと考えてよいであろう。

石場山5号墳は、5基からなる石場山古墳群中にある。羨道部は埋没し、天井部を欠いている。玄室長1.6m以上、幅1.5mを測る。玄門部が埋没しているため玄室全体の形態は不明であるが、長方形プランであろう。石室主軸に沿って長さ約1.5m、幅0.7mを測る箱式石棺が内包されている。出土遺物は知られていない。

高住12号墳は、12基からなる高住古墳群中にあるが、12号墳周辺には古墳は知られておらず、単独で存在するものであり、他の古墳とは支群を異にしている。墳丘は大半が流失しており、石室が露出している。石室は、玄室内に流土が堆積しており、詳細は不明であるが、玄室長4.2m以上、幅2.1m、現在高2.1mを測る。玄室比は2.0以上で長方形を呈す。壁体構成は、基底石上に割石をやや持ち送りながら塊石積みするもので、目地が通っていない。天井は、玄門部に向かって階段状に傾斜する平天井をもつ。この地域では唯一天井形態がわかるものである。玄門形態は、流入土のため不明である。出土遺物は知られていない。

葦岡長者古墳（吉岡1号墳）は、15基からなる吉岡古墳群中にあり、1983年に調査が行われている。墳丘は径約14mと推定されている。石室は、玄室長3.34m、幅2.31m、現存高1.83mを測る。玄室比は1.4と幅広の長方形を呈す。平面形は、左袖部は失われているが、両袖式に、幅0.67m、長さ2.21mを測る狭長な羨道が接続するものであったと考えられている。壁体は、腰石上に割り石をほぼ垂直に積むもので、横目地が通っている。玄室内には、奥壁に向かって右側に板石を組み合わせた箱式石棺が安置されているが、原位置を保つものかどうかは不明である。出土遺物は、須恵器蓋杯、高杯、台付壺、横瓶、大型甕、鉄刀、刀子、鉄鏃、飾金具、銜（?）、釣針など豊富に出土している。これらの出土遺物のうち最も遡る須恵器類はTK10の新相並行と考えられ、6世紀中葉頃に築造されたものと考えられる。

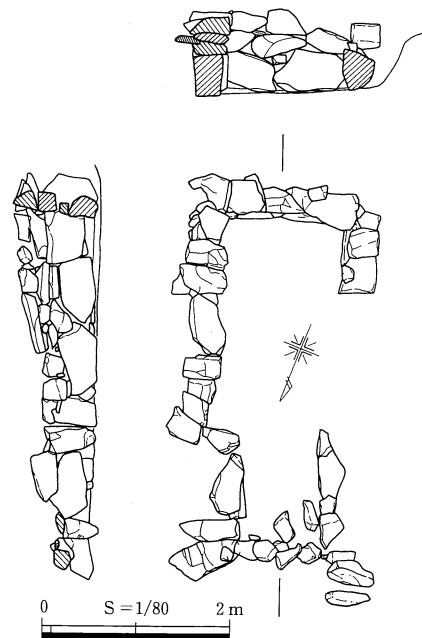
2. 形態的特徴

これらの石室を見ると、形態的には、石室平面形は片袖、両袖の両形式が認められるが、玄室の平面形態は長方形が基本となっていることが共通している。壁体構成についても、腰石上に割り石、塊石をほぼ垂直に積みあげる手法は共通しているものといえる。また、唯一天井形態が判明する高住12号墳は、玄門部に向かって傾斜する平天井形態で、千代川右岸域の中高式天井とは異なる形態を示している。玄門部の形態は、立石を立てるものではなく、羨道幅と同じ袖部が構成される。また、石場山5号墳、葦岡長者古墳に見られるように玄室内に主軸に平行する箱式石棺を安置するものがこの地域の特徴である。

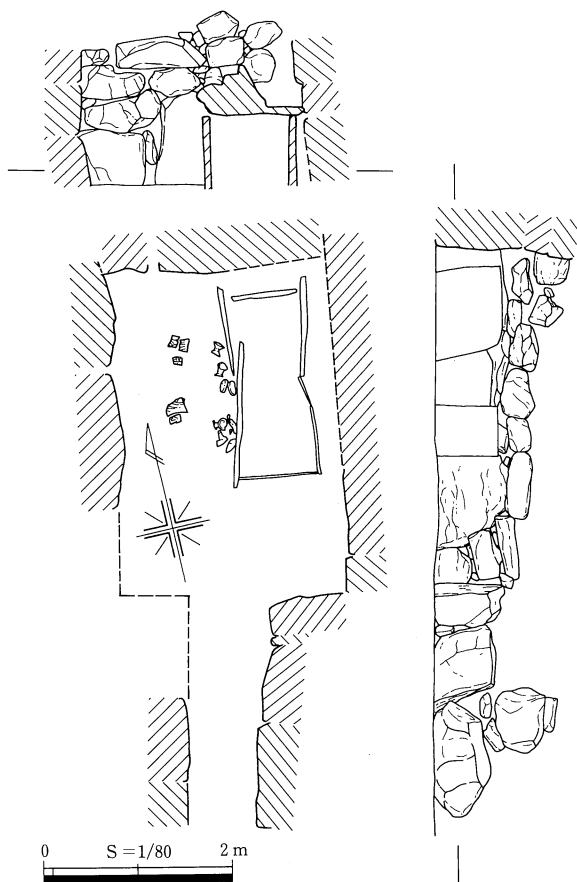
さて、湖山池からはやや離れるが、山ヶ鼻古墳（古海13号墳）は、13基からなる古海古墳群中にあり、一辺約

11～13mの方墳と考えられている。墳丘上半部は完全に失われており、石室が露出している。石室は、全長5.1m、玄室長2.0m、幅1.08m、高さ0.71～0.94m、羨道長3.1m、幅1.4～1.5mを測り、凝灰岩を刳り抜いた形態のものである。玄室は、1枚の床石の上に巨石を刳り抜いて天井部・壁からなる部分を乗せるものである。床石には蓋石を受けるための刳り込みが施されている。平面形は右袖部をもつ片袖式で、羨道部にあたる部分は、大型の一枚石を3枚組み合わせている。出土遺物は、開口が古く全く知られていない。このため、この古墳の時期は不明であるが、形態的には大阪府石の宝殿古墳、奈良県鬼の俎・廁古墳など、7世紀中頃と推定される畿内の横穴式石槨と類似しており、同時期と考えられる。

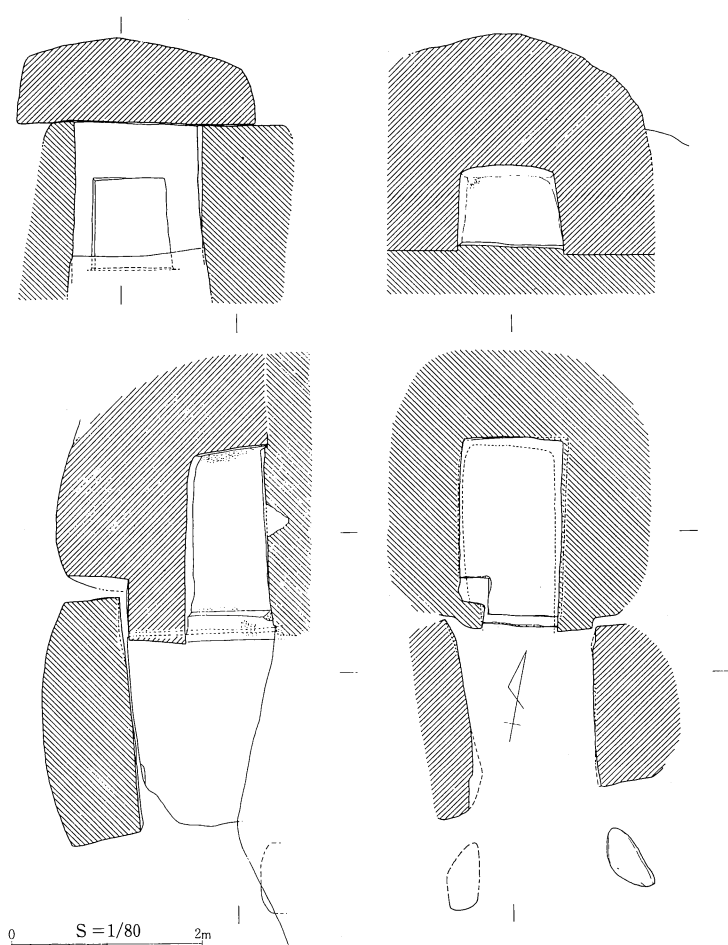
おおむね、因幡地方の横穴式石室は、畿内的な様相が強く、長方形のプランが主流で、岩美町小田川流域の高野坂2号墳・高野坂9号墳・高野坂10号墳など、および袋川中流域の神垣8号墳・新井2号墳・橋本38号墳では石室内に家形石棺を内包するものがある⁽⁴²⁾ほか、箱式石棺を内包するものがあり、埋葬形態に上下関係が認められる。湖山池周辺の横穴式石室は、家形石棺を内包する首長層に比べて下位の存在であることが考えられる。しかし、その中で山ヶ鼻古墳は後に高草郡の中心地にあり、より先進的に畿内との関係をもって出現したものと考えられる。



挿図161 倉見9号墳石室実測図



挿図162 葦岡長者古墳（吉岡1号墳）石室実測図
（註28より再トレース。一部変更。）



挿図163 山ヶ鼻古墳（古海13号墳）石室実測図
（註29より。一部変更。）